

# 学校・家庭・地域の連携中で高め合う心の育成を図る教育活動

## —茨城県大子町立生瀬小学校のPTAを事例にして—

松婷 (SONG TING)

### I. はじめに

2021年1月、中央教育審議会が「「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」という答申を公表した。答申での義務教育の分野では、学校ならではの生徒同士の学び合いや、多様な他者と協働する探究学習などを通じて、地域の一員として主権者としての意識を育むことを主張している。そして、「学校・家庭・地域がそれぞれの役割と責任を果たし、相互に連携・協働して、地域全体で子供たちの成長を支えていく環境を整備」という主張が記述されている。学校・家庭・地域をつなぐ教育団体として Parent-teacher association (以下、PTA) は、このような重要な役割を担っている。

近年、少子化により地域コミュニティの低下や労働力不足による地域経済の縮小、人口減少は教育問題ももたらしている。日本全国の小中学校の学級数は年々減少傾向にある。特に地方の山間部などでは過疎化も加わり、小規模の学校も出てきている。小規模校とは、生徒数が少なく、複式学級(2学年1クラス)を採用せざるを得ない学校のことである。通常、児童生徒数が減少した学校は統廃合が行なわれる。そのような中、学校の統合によって遠距離通学を余儀なくされる場合があるなど、生徒の負担が大きくなる。そして、児童数が少ないため、児童同士が交流する場が減ることや、社会性を育みながら成長していくという機会が減少していることもある。この問題について、人間の発達の過程を考察した精神医学者のサリヴァン(Sullivan, H.S.)は、児童期を社会化の修正の時期と捉えている(サリヴァン, 2022)。社会化の修正の定義は、子どもが他者との関係において常に対立や矛盾を抱え、それを調整・解決する相互作用の中で自己中心性を克服していく過程であり、思考の客観性を獲得していく過程でもあるということである。そして、このような社会化の修正は、仲間集団経験を通して可能になると指摘している。仲間集団の規模について、住田(2000)は、小学校低学年では、2人仲間集団が圧倒的に多く、小学校の中学年になると2～4人、さら

に高学年になると 2～5 人の集団に拡大することを明らかにした。また、サリヴァンは、仲間集団の形成活動をもっとも良い時期がギャング・エイジ (Gang age) の児童期だと指摘している。さらに、小学生の頃の子どもには、親の参加が最も効果的であることが指摘されている (Cheung, 2009, p. 255)。それでは、小規模の学校はこの問題にどのように取り組んでいるのか、そして、仲間活動の中での児童の姿はどのような様子だろうか。この問題について、本稿では PTA の活動に注目しながら検討してみたい。

過疎地域の PTA 活動に関する研究は、下森の研究がある。下森 (1976) は、過疎地域の児童に良い環境を作るために、PTA は子どもを持たない人たちに PTA 広報を配布することで、学校 PTA や子どもの成長する姿に関心を持ってもらうことができると述べている。しかし、その PTA の様子については触れていない。

そこで、本研究では過疎地域における大子町立生瀬小学校 (以下、生瀬小学校) の PTA を事例にし、保護者への質問紙調査やインタビューをすることによって、PTA 活動の実態や意義を明らかにすることを目的とする。なお、生瀬小学校を取り上げた理由は、二つある。一つ目の理由は、生瀬小学校が過疎地域にある小学校ためである。二つ目は、2021 年 11 月、令和 3 年度優良 PTA の選考に各都道府県教育委員会が推薦し、茨城県内の小学校 690 校のうち、2 校のうちの 1 校に生瀬小学校が選ばれた。このように、生瀬小学校の全会員参加型 PTA が活発に運営されており、小規模学校の PTA の好例ともいえよう。

本稿は、以下の手続きによって上記の目的を達成することを目指す。第一に、調査対象となる生瀬小学校の PTA 事業の概要を提示する (第Ⅱ章)。第二に、PTA 会長へのインタビューや実際の活動への参加を通して、生瀬小学校の「やまびこ水田」をめぐる体験活動および「やまびこ祭」の活動を考察することで、その活動の様子を明らかにする (第Ⅲ章)。第三に、PTA 会長へのインタビューや保護者への質問紙で検討したうえで、PTA の必要性を解明する (第Ⅳ章)。以上の検討することによって、生瀬小学校の PTA 活動の意義を明らかにする。

## Ⅱ. 生瀬小学校における PTA 事業の概要

本章では、生瀬小学校における PTA の実態を捉えるにあたって、生瀬小学校の地域性と PTA の組織構成についてその概要を示す。

### 1. 生瀬小学校の地域性と学校の概要

生瀬小学校の校舎は、山に囲まれ、学校林や学校田、ビオトープに囲まれ、豊かな自然の中にある。学校は 1987 年、大野小学校と小生瀬小学校の統合により設立され、全校児童 34 人、教職員 14 人の小規模な小学校である。学校の理念は「未来を幸せに生きる力を育む教育の推進」であり、そして教育目標は「自ら求め学び取り、みんな

で磨いて拓く、心豊かでたくましい児童の育成」ことである。また、子どもたちが未来を幸せに生きるための自立した能力と協働の心を育むため、最新 ICT によるハイブリッド教育の推進を実践している。さらに、小規模な学校にもかかわらず、保護者たちや地域の人びとの大きな協力を得ながら、地域にある学校として、地域と共に、学校の教育活動に取り組んでいる。

## 2. 「父母と先生の会（PTA）」の組織構成およびその職能

生瀬小学校の PTA 事務局は学校の内にある。生瀬小学校「父母と先生の会（PTA）」（以下、PTA）と称す。2022（令和 4）年度の学校の児童数と実家庭数は以下の通りである。児童数は 34 人であり、会員数（実家庭数）は 26 人である。

PTA の目的は、父母と教職員が協力し、学校と家庭及び地域社会との連携を密にし、児童の健全なる育成を図ることを目的とする。そして、この事業を達成するために、次の事業を行なっている。①教育を中心とし、学校、家庭、地域との連携に関する事項、②会員相互の研修に関する事項、③教育環境の整備、児童奨励に関する事項、④校外の生活指導に関する事項、⑤その他、本会において必要と認める事項である。

生瀬小学校の PTA は総会と運営委員会に大きく分けられる<sup>1)</sup>。まず、総会は PTA の最高の決議機関であり、年 1 回定期的に開催する。そして、総会では、次のことを審議する。それは①事業報告並びに事業計画の審議と承認、②予算や決算の審議と承認、③会則の審議と承認、④そのほか、本会の目的を達成するのに必要な事項。次に、運営委員会は、役員、学年委員長、専門委員で構成する。そのなかで、まず、役員の設置は以下の通りである。会長 1 名、副会長 2 名、監事 2 名、書記 1 名、会計 2 名と幹事若干名となっている。次に、学年委員会は、学年単位で活動し、学年に即した福利厚生及び体育に関する事業などを行ない、本会事業の目的構成に協力する。そして、専門委員では、広報委員会と女性ネットワーク委員会がある。広報委員会は、広報に関する事業の計画・運営に当たり、広報紙を発行する。女性ネットワーク委員会は、AED 研修、メディア研修などに関する事業の計画・運営に当たる。そして、茨城県や大子町の女性ネットワーク委員会事業に参加する。以上のほか、PTA の組織内で、小生瀬、高柴、内大野、外大野、大生瀬の五地区の地区代表委員に分かれる。地区委員は、各地区 1 名を会員の中から互選し、会員相互の連携や会費の徴収、特別会員の募集などを行なう。以上が、生瀬小学校の PTA の組織構成である。それでは、次の節で、生瀬小学校の PTA 事業の活動内容を具体的に見ていく。

## 3. 2021（令和 3）年度における生瀬小学校の PTA 事業内容

第 1 表は昨年の生瀬小学校の PTA 事業報告の内容である。

第 1 表のように、生瀬小学校の PTA 事業について、PTA 独自の活動、学校と連携した活動、地域と連携した活動の 3 つのカテゴリーで検討する。まず、PTA 独自の活動は、独自活動と位置づけた。例えば、表のなかでの PTA 総会、PTA 地区委員・合同専門

第1表 2021（令和3）年度 事業報告

No.	日付	主な事業内容・学校行事
1	4月2日（金）	鯉のぼりあげ
2	4月6日（火）	第1学期始業式 第35回入学式
3	4月18日（日）	授業参観，学年懇談会，PTA総会，PTA地区委員・合同 専門委員会，第1回本部委員会
4	4月24日（土）	PTA連絡協議会
5	5月5日（水）	代かき，池掃除，鯉のぼりあげ（本部役員 学年委員 会）第2回本部委員会
6	5月12日（水）	田植え
7	6月30日（水）	授業参観 学期末懇談会
8	7月20日（火）	第1学期終業式
9	9月1日（水）	第2学期始業式
10	9月3日（金）	臨時休業日（～9月24日（金））
11	9月25日（土）	稲刈り（本部役員 学年委員会）第3回本部役員会
12	10月15日（金）	脱殻（本部役員 学年委員会 4、5、6年児童） 「やまびこ」第93号発行
13	10月30日（土）	運動会 引き渡し訓練
14	11月16日（火）	大子町女性ネットワーク委員会
15	11月19日（金）	優良PTA文部科学大臣賞表彰式
16	11月24日（水）	大子町PTA女性ネットワーク委員会研修会
17	12月1日（水）	授業参観 学期末懇談会 PTA広報委員会
18	12月17日（金）	生瀬小中学校PTA合同本部役員会
19	12月24日（金）	第2学期終業式
20	1月11日（火）	第3学期始業式
21	1月31日（月）	臨時休業日（～2月18日（金））
22	2月18日（金）	PTA本部役員選考委員会（オンライン）
23	2月25日（金）	授業参観 学年末懇談会（オンライン）
24	3月4日（金）	新入学児童保護者説明会
25	3月16日（水）	PTA会計監査 「やまびこ」第94号発行
26	3月23日（水）	第35回卒業式
27	3月26日（土）	大子町PTA連絡協議会新旧評議員会
28	3月31日（木）	離任式

（生瀬小学校（2022a）により筆者作成）

委員会、本部委員会などがある。これらの活動は、主にPTA側により主催されている。次に、学校と連携した活動である。例えば、4月の鯉のぼりあげ、毎年の授業参観や学期末懇談会、10月の学校運動会などがある。これらの活動は、主に学校側が企画し主催するが、PTAが協力をすることで、活動をスムーズに進めることができ、そして学校側にとっては、PTAが加入することで学校側が分担し運営できるようになり、保護者たちも実際に児童と触れ合い機会を増やすことができる。最後に、地域と連携した活動は、地域の住民に支えられて活動している。例えば、例年11月ごろに行われる「やまびこ祭」は、地域の人々も参加し、教師たちや保護者たちと協力して行われる。

以上、生瀬小学校におけるPTA独自の活動、学校と連携した活動、地域と連携した活動の3つのカテゴリで考察してきた。それでは、PTA活動はどのような様子なのかを次の節で見えていく。

### Ⅲ. 生瀬小学校におけるPTA活動の実際

前章では、生瀬小学校のPTAの構成やその機能について考察してきた。本章では、生瀬小学校のPTA行事となる「やまびこ水田」に関する体験活動や「やまびこ祭」活動を通して、PTAの実際の様子を見ていく。

#### 1. 「やまびこ水田」をめぐる体験活動

第2表は今年で行った「田植え体験学習」と「稲刈り体験学習」の活動内容である。そして、PTA会長にインタビューをすることで、活動の実態がどのようなものなのかを知ることができる。

生瀬小学校は学校田がある学校である。この水田は地元の方から水田を貸していただいている学校田である。「やまびこ水田」と呼ばれる。毎年学校では、この「やまびこ水田」をめぐる活動を行なっている。

まず、「田植え体験学習」活動である。「大子町生瀬小学校学校だより」第7号によれば、今年の5月10日、全校児童で「やまびこ水田」で田植えを行なっていた<sup>2)</sup>。1年生の子どもたちは初めての田植えであったが、上手に植えることができた。また、PTA小林会長とのインタビューを通して、活動の過程で、高学年が低学年の児童たちを率いて活動していることもわかる。こうして、生瀬小学校は小さいながらも、児童同士の助け合いがあり、みんなで協力し合う雰囲気を作っている。次に、「稲刈り体験学習」について、「大子町生瀬小学校学校だより」第7号によれば、9月22日、コロナの影響で3年ぶりに稲刈りを行なうことができた<sup>3)</sup>。子どもたちは草を刈ったり、稲を運んだりする体験をした。このような共同作業の雰囲気は、子どもたちが協力し合い、グループの一員としての自主性を育むことにもつながるといえる。

また、PTA会長へのインタビューでも、その過程で保護者も子どもたちの活動に協力していることがわかる。例えば、田んぼはすぐには生えないため、活動が始まる前

第2表 「田植え体験学習」と「稲刈り体験学習」の活動内容

	項目	田植え体験学習	稲刈り体験学習
1	日時	2022年4月10日(火)	9月22日(木)
2	場所	生瀬小学校「やまびこ水田」	
3	日程・内容	①開会行事(全学年) ・開式のことば ・学校長あいさつ ・PTA会長あいさつ ・諸注意 ・閉式のことば ②田植え体験学習(全学年)	①開会行事(全学年) ・開式のことば ・学校長あいさつ ・PTA会長あいさつ ・諸注意 ・閉式のことば ②稲刈り体験学習(全学年) ③おだかけ体験学習
4	協力依頼内容	①田植えをする児童への手助け ②苗の補給 ③田植えロープの移動など	①稲刈りをする児童への手助け ②わらを束ねる手助け ③おだかけの手助け

(生瀬小学校(2022b)および生瀬小学校(2022c)により筆者作成)

でも4月から5月にかけて保護者たちが田んぼの作業を行なうことがある。また、支援が必要な場合には、地域の住民たちが機器を提供して支援することもある。このように、このような活動を通じて、子どもたちが集団の中で、児童同士と協力して何かを成し遂げる場を提供しているのである。また、PTA保護者の方々や地域の住民の協力もあり、活動を円滑に進めることができる。

## 2. 「やまびこ祭」の体験活動

生瀬小学校は、約4ヘクタールの学校林を持ち、そして校舎裏には約2.5ヘクタールの森が広がっている。昨年、国土緑化推進機構が学校林を有する学校から募集した「学校林を活用した森林環境教育促進事業」に参加した。生瀬小学校では、以前からPTAと連携して学校林を活用した教育活動を行っており、その実践が評価され、今年度の助成対象校に選ばれた<sup>4)</sup>。例年は熟したもち米を餅にして、学校教員や保護者、児童や地域の人びとが一緒に味わう形で行なわれた。今年、学校は「学校林を活用した森林環境促進推進事業」の指定を受け、保護者たちと共に、「ふれあいの森林」の自

然環境を活かした自然体験活動に取り組んでいる。では、学校はこの「ふれあいの森林」をどのように活用しているのか。第3表は今年の活動内容である。

第3表のように、「やまびこ祭」の活動内容は、「学習発表」、「ふれあいの森林での活動」、「ふれあいの森林の音楽会」という三つの部が構成される。では、その実際にはどのような様子だろうか。

まず、「学習発表」については、全学年の児童が参加した。7月の交流では、筑波大学の留学生向けにパビリオン形での世界一周のツアーを行い、子どもたちが感謝の気持ちを含め、今回は各学級で発表をした。1年生は、国語科および生活科の学習では、四季折々を通年で観察し、自分が気づいたものをGoogleのアプリ「Jamboard」に記録していた。発表は、大子町のキャラクター「たき丸」と学校の良いところを紹介した。2年生は、生瀬小学校のキャラクターと生瀬地区についての紹介を発表した。3年生と

第3表 「やまびこ祭」の活動内容

流れ	学習主題	活動内容	保護者の動き
第1部	学習発表 8:00～9:20	①はじめの言葉	・体育館の玄関から入場する  各自：スリッパ持参マスク着用する
		②学校長あいさつ	
		③PTA 会長あいさつ	
		④学習発表	
		⑤感想	
		⑥ベンチ・ネームプレート披露	
		⑦おわりの言葉	
第2部	ふれあいの森林での活動 9:30～10:30	①裏山中央階段集合	・お子さんの縦割り班場所へ移動  ・保護者・来校者の皆様は、山に登る際には、ベンチ、ネームプレート、楽器運びにご協力する。
		②ベンチ設置場所へ移動	
		③写真撮影	
		④ベンチ見学（ふれあいの森林を散策しよう）	
第3部	ふれあいの森林の音楽会 ・岡倉さん ・児童の発表 10:40～11:40	①はじめの言葉	・児童の座るベンチを囲んで、ふれあいの森林の音楽会に参加していただく。
		②学校長あいさつ	
		③音楽会の発表	
		④児童発表	
		⑤おわりの言葉	

（「生瀬小学校（2022d）により筆者作成）

4年生は、「となりのトトロ」の曲とともに、スライドショーによる音楽発表が行なった。また、5年生と6年生は、茨城県の昔の民話である「Fox of Mt. Jinbe（甚兵衛山のきつね）」というテーマを、英語で発表した。

以上、子どもが学校での郷土学習「大子学」<sup>5)</sup>で学んだことを、スライドや劇という形で発表した。このような活動で、子どもたちの自分自身の住む地域である大子町の自然・歴史文化・農産業・偉人・観光への理解を促し、郷土（地域）への愛着を育むことができるといえる。一方で、子どもたちにとって、団体の一員としての自覚を深め、自分の役割や行動の仕方について考え、適切な行動できるようになったともいえよう。

次に、第2部の「ふれあいの森林での活動」では、教師や保護者たち、活動に参加した大学生たちの協力を得て、子どもが決めた色を塗ったベンチやネームプレートを山に運び上げていた。その過程で、高学年の児童が下り坂で手を貸すなど低学年の児童を助ける姿が見られた。その後、みんなで記念写真を撮影した。このような活動は、子どもたちが大きくなった後、自分が制作したネームプレートを振り返ってみると、とても有意義なことだと考えた。そして子どもの成長にとって、身近な生活環境の中で自分の成長の足跡を残すことは、それだけでとても意味のあることである。

最後の第3部では、「ふれあいの森林の音楽会」を行なった。音楽家の岡倉さんとその仲間が、美しい曲を披露していた。そして途中で、保護者たちから観客に音楽に合わせて振ることができる音楽器具が配られていた。晩秋の落ち葉がゆっくりと落ちてくる風景のもとで、音楽家の美しいメロディーを聴いていると、空気の中にロマンチックで穏やかな雰囲気漂っている。その際には、都会の学校では、夢の中でしか実現できない絵なのではないかと考えられた。

このような風景は学校の恵まれた自然環境のおかげ、子どもはこのように自然に感化されて成長し、自分自身も自然と一体になったようである。そして、そのような環境で育った子どもたちは、心も豊かになっていくだろう。活動の終わりには、子どもたちが「ドレミのうた」と「校歌」の合唱を披露した。

以上、「やまびこ祭」の活動の実態を考察した。次章では、保護者の方々への質問紙調査から、保護者のPTA活動に対する意識がどのようなものなのかを検討する。

#### IV. 生瀬小学校におけるPTAに関する意識調査

本章では、生瀬小学校のPTA保護者への質問紙調査を通じて、保護者のPTAに対する意識を分析していく。まず保護者たちが性別割合意識についてどのように考えているのか、次に学校のPTAの必要性について認識しているのか、最後に学校のPTAについて今後どのようなことが望まれているのかを探ることにした。調査は2022年11月中旬に実施した。また、その質問に回答してもらい、選択と自由記述を含めた質問を



第4表 回答者の属性

回答者	仕事の類別			農業と関係があるか	
	フルタイム	パートタイム	していない	している	していない
父	5	0	0	2	3
母	8	1	1	4	6

(質問紙調査より)

設定した。

### 1. アンケート質問の内容概要

生瀬小学校の保護者たちに向け質問紙には、以下の3つの部分がある。

a) あなたご自身のことについてお教えてください。

b) これまでのPTAとの関わりについておたずねします。

c) PTAのあり方についてどのように感じられているかおたずねします。それでは、まず回答者の属性を整理した。

### 2. 回答者の属性

父親が5人、母親が10人である。保護者たちの勤務状況については、第4表のような結果を得た。

第4表からわかるように、父親の側は、5人全員がフルタイムの仕事に就いており、うち2人が農業関係者である。また、10人の母親のうち、8人がフルタイムの仕事に就いている。そして、半分は農業に関わっている。この点は、大子町自体は農林産業が発達していたことと関係していると考えられる。また、母親側が仕事している人と仕事していない人の割合が9対1であることから、女性の多くが出産後に仕事に復帰していることがわかる。それでは、次の節では調査の結果を見ていく。

### 3. 質問紙調査結果の分析

本節では、次の3つの側面から考察する。第一に、性別割合分業意識についてである。第二に、PTA役員をやってみてよかった点である。第三に、PTA活動の必要性を明らかにする。

#### a) 性別割合分業意識の分析

性別役割分業 (gender division of labor) とは、性別によってつくられた男女の生活上の行動様式である (高橋保, 2006)。また、社会的・文化的性役割では、「男は仕事、女は家事・育児」という「性別役割分担意識」は、高度経済成長を背景に、1960年代以降、「サラリーマンの夫」が外で働き、「専業主婦の妻」が家庭を守り支えるという意識がさらに強くなった。しかし、1975年の国際婦人年から始まった取り組みでは、男女が仕事と家庭の分野で、責任を共有することが重視されるようになった。日

本でも 1985 年 6 月に「女性差別撤廃条約」（正式名称：「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」）が批准され、その中で、政治的、経済的、社会的、文化的そのすべての分野において、女性の性に基づく排除や制限、さらには区別することも差別にあたると定義している。そして、同年に制定された「男女雇用機会均等法」により、日本の女性は法制度的に社会進出の平等の機会を得た。さらに、1999 年に制定された「男女共同参画社会基本法」では、男女がともに仕事、学習、地域活動に参加できるように、家事・育児・介護などの家族の役割を男女で分担することが求められている。

しかし、このように女性の権利を擁護する一連の条例が施行されたにもかかわらず、今年公表され「ジェンダー・ギャップ指数 2022」を見ると、男女性差には依然として多くの問題がある。日本の順位は、146 カ国中 116 位であり（前回は 156 カ国中 120 位）、前回と比べて順位はほぼ変わらず、先進国の中で最も低い水準であった。労働力の比率で女性が過度に減少（男性 15.3%増、女性 19.5%減）したことが要因と考えられる。

このような社会的背景の中、学校と家庭をつなぐ PTA の P は、そもそも「ペアレント」という意味を持っている。つまり、PTA とは、父親と母親の双方が参加して行なうべき活動を意味している。そのため、まず保護者が自分の持つ社会的役割や家族の役割に対して、どのように認識しているかを検討する必要がある。今回の調査では、この問題意識について、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の 4 件法で、第 5 表と第 6 表のような結果を得た。

第 5 表 母親 上位 8 項目（回答者数 10 人）

「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」の合計

No.	質問内容	人数
1	女性には女性らしい感性があるものだ。	9
2	男性は仕事をして家計を支えるべきだ。	5
3	自治会や町内会の重要な役職は男性が担うべきだ。	4
4	共働きでも男性は家庭よりも仕事を優先するべきだ。	3
5	共働きで子どもの具合が悪くなった時、母親が看病するべきだ。	2
6	PTA には、女性が参加するべきだ。	2
7	家事・育児は女性がするべきだ。	0
8	結婚したら姓を変えるのは女性であるべきだ。	0

（質問紙調査より）

第6表 父親 上位8項目 (回答者数5人)

「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」の合計

No.	質問内容	人数
1	女性には女性らしい感性があるものだ。	5
2	男性は仕事をして家計を支えるべきだ。	3
3	共働きでも男性は家庭よりも仕事を優先するべきだ。	1
4	家事・育児は女性がするべきだ。	1
5	自治会や町内会の重要な役職は男性が担うべきだ。	0
6	共働きで子どもの具合が悪くなった時、母親が看病するべきだ。	0
7	PTAには、女性が参加するべきだ。	0
8	結婚したら姓を変えるのは女性であるべきだ。	0

(質問紙調査より)

まず、注目したいのは、「女性には女性らしい感性があるものだ」という設問に対する肯定的な回答(「そう思う」「どちらかといえばそう思う」)の割合である。母親側は10人中9人がそう思い、一方で、父親側は5人全員がそう考えた。次に、「男性は仕事をして家計を支えるべきだ」という質問には、母親の半数、父親の過半数が肯定している。このように、「女らしさ」や「男らしさ」などの社会通念は、強固に存在されつづけているのである。つまりジェンダーに対する一般化されたイメージや固有の観念が強いといえよう。一方、「自治会や町内会の重要な役職は男性が担うべきだ」という質問に対しては、母親の10人中半数以下がそう思っているのに対し、父親側にはそう思っている人はいない。このように性別割合に対する意識は、女性は女性らしくあるべきだというジェンダー秩序の考えを両親ともに持っているが、女性の就業が増え、女性リーダーが職場で活躍することを求める社会の声がしだいに高まっていく中で、母も父も、自治会などの重要な役割を担うのが男性だとは考えていないようである。

一方で、気になったのが「共働きでも男性は家庭よりも仕事を優先するべきだ」と回答した人は、母親は10人中3人が肯定的なのに対し、父親側は5人中1人しか肯定していない。そして、家庭での役割分担に関する「共働きで子どもの具合が悪くなった時、母親が看病するべきだ」という質問について、母のうち2人だけがそう思っているが、父の側に肯定的な人はいない。また、「PTAには、女性が参加するべきだ」という質問に対して、母親側は2人だけそう思っ、父親はそれを肯定していない。さらに、「家事・育児は女性がするべきだ」という質問について、父親の5人に1人は賛成しているが、母親側には賛成している人がいない。このように、家事や子育てについては、一般的に、女性を家事や家族の世話をすることと結びつけるパターンを合意

することと思われるが、父親も家事や子どもの育成を分担しようとする姿が見られた。そして、共働き夫婦の働き方がメディアで取り上げられる中で、男性も家事や育児をして当たり前という意識が強まっているようである。

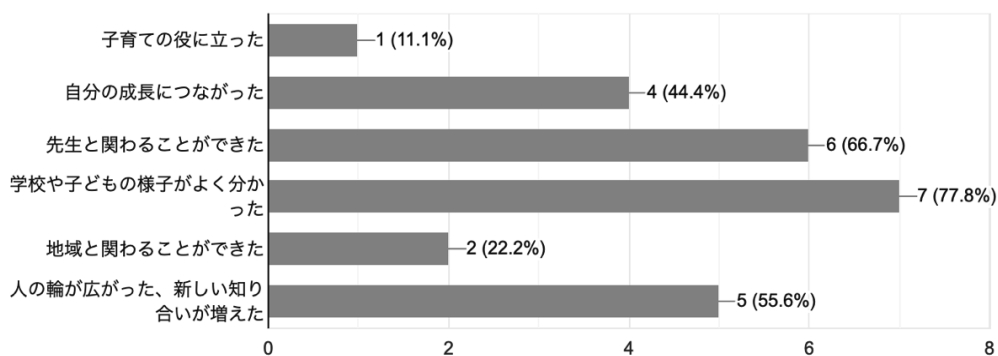
最後に、「結婚したら姓を変えるのは女性であるべきだ」について質問である。日本では「選択的夫婦別姓制度」をめぐる議論が長く続いている。結婚するとパートナーと同じ姓(夫婦同姓)を名乗るのが当たり前の日本では、今や世界的に見ても少数派になっている。現在の日本では、この制度は実現していないが、今回の結果から母親でも父親でも、結婚したら女性は改名すべきだということに否定的であることがわかる。

以上のように、女性の就職の活発化に伴い、家事を負担する仕事としての意識が女性側だけではなくてきていることがわかる。しかし、性別自体の特徴についての意識は、男女ともに根強く根付いていることもうかがえる。こうした性別役割分業の意識の違いが、PTA 保護者の活動への参加姿勢にも影響しているといえよう。

#### b) PTA 役員をやってみてよかった点

PTA の委員や役員を務めてきた保護者にとって、PTA に参加することは、どのような点が良いのであろうか。第 1 図は質問紙より得た結果である。保護者 15 人のアンケートのなかで、9 人が PTA の委員や役員の経験があった。結果としては、学校や子どもの様子を知ることができる保護者が最も多いことがわかる。また、個人的な人間関係においても、人脈を広げることができよう。さらに、自身の成長にも関係があると考えている保護者も半数近くいった。この点については、生瀬小学校の PTA 会長である小林さんとの対談でも触れていた。小林さんは以下のように語っている。

「今ではこういう期待が自分のところに巡ってきた時には、やっぱり不安な気持ちはまだあるんですけども、見えないでチャレンジしてみる。とりあえずやってみようという気持ちになりました。」(聞き取り調査により)



第 1 図 PTA 役員をやってみてよかった点 (質問紙調査より)

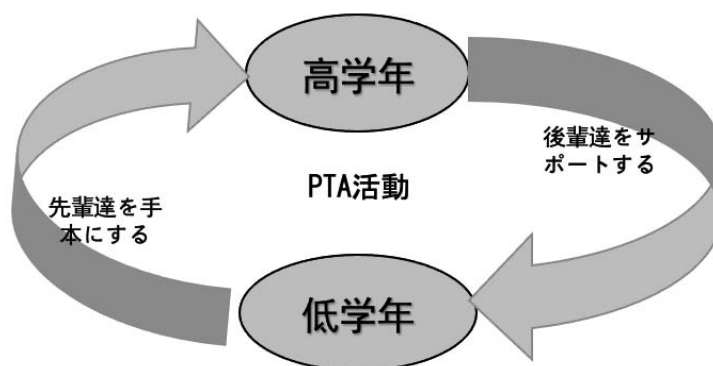
小林会長のお話から、PTA 役員という仕事が自分にとってもチャレンジであることがわかる。そして、小林会長にはお母さんという家族の役割も果たしている。それによって、活動に参加している女性役員に対し、その過程で自分自身を認識し挑戦し、自分の価値を獲得していくプロセスでもある。また、PTA は本来「成人教育」として戦後の日本に現れた。このことから、PTA は子どもの成長だけではなく、保護者たち自身に対しても同じことをしていることがいえよう。

### c) PTA の必要性

PTA の必要性について、保護者はどのように考えているのであろうか。以下は保護者がアンケートの自由陳述で回答した内容である。

- ①教育環境について保護者の視点と教職員の立場から話ができる。
- ②学校の活動に協力しやすい。保護者と学校の連携がとりやすい。
- ③PTA は親どうしの交流があり、行事に関わることで子どもの学校での様子を知ることができる。
- ④学校と協力して、子どもたちの学習環境整備や体験をさせてあげるために必要だと思う。
- ⑤協調して物事を行うことが大切だからだと思います。
- ⑥子どもの様子や学校の様子がわかるから。
- ⑦先生との関わる時間があるので、学校行事を通してたくさん情報を得ることができる。子どもたちの様子もよくわかる。

(質問紙調査より)



第2図 低学年と高学年の児童同士関係

このように、PTA は、保護者が子どもたちの学校での様子を知るとともに、学校の先生と交流し、学校と協力して子どもの学習環境を整備することにもつながる。つまり PTA は、学校と保護者の対話の場を提供しているのである。また、PTA 会長によれば、生瀬小学校は小規模学校であるため、日常の学校生活では低学年の児童と高学年の児童が混在して活動していることがわかる。低学年と高学年の児童同士の関係は第 2 図のようになる。つまり学校の活動では、高学年の児童が低学年の児童を保護しサポートし、低学年の児童も高学年の児童との交流の中で、知らず知らずのうちに先輩たちを自分の手本にしている。

## V. 終わりに

本稿の目的は、過疎地域における大子町立生瀬小学校の PTA を事例にし、保護者への質問紙調査やインタビューをすることによって、PTA 活動の実態や意義を明らかにすることであった。その結果は以下のように整理される。

第 1 点として、学校自体の PTA 活動や大学の留学生たちとの連携を通して、児童同士が力を合わせて活動している様子が見られた。このように、生瀬小学校の PTA 活動は、仲間と高め合う心の育成することができるといえる。また、先に述べた社会化の修正という重要な時期にある児童にとって、生瀬小学校は小規模な学校であるため、PTA 保護者の参加や地域住民の協力がより重要になっている。つまり、保護者と教員の密接な協力することで、児童が安全で温かい学校生活を送れる環境がつけられているのである。

第 2 点としては、児童の健全な成長・発達を支えるためには、保護者と教員が学び合い、ともに活動し、児童だけではなく、大人自身の人間的な成長を実現していくことができよう。以上の点を踏まえ、PTA は学校・家庭・地域のさまざまな主体との架け橋となりうるのである。

最後に、今年の 11 月、男女共同参画局により「令和 4 年度 性別による無意識の思いこみ (アンコンシャス・バイアス) に関する調査研究」の結果のなかで、「PTA には、女性が参加するべきだ」といった、男性は 22.9%、女性は 13.2%であった。つまり、性別役割意識に同意する男性の割合は 2 割を超えており、全体的に男性の割合が高いということである。このように、PTA の学校行事の参加者に対する一般的なイメージは、女性が主体となっているものが圧倒的に多いようである。PTA 保護者の性別割合に影響を与える要因について、今後の課題としたい。

## 謝辞

本稿をまとめるにあたって、貴重なお話を聞かせていただいた生瀬小学校の教職員、PTA 会長や保護者の皆様に大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

## 注

- 1) 生瀬小学校 (2022) 「令和4年度 父母と先生の会総会要項」
- 2) 生瀬小学校 (2022) : 「大子町生瀬小学校学校だより」第7号
- 3) 生瀬小学校 (2022) : 「大子町生瀬小学校学校だより」第22号
- 4) 生瀬小学校 (2022) : 「大子町生瀬小学校学校だより」第38号
- 5) 「大子学」とは、大子町で生まれ育つ子どもたちが、保護者や地域の温かな人々と交流しながら、体験を通して、地域について学び、地域について発信し、ふるさとに誇りを持ち、さらには、自己の生き方についても考える学習である。

## 文献

- サリヴァン(Sullivan, H. S) (2022) : 『精神医学は対人関係論である』, みずず書房, p. 256.
- 下森華子 (1976) : 過疎地のPTA活動の中で, 社会教育 **31**(7), p. 14.
- 住田正樹 (2000) : 『子どもの仲間集団の研究』(第二版), 九州出版社, p. 545.
- 高橋保 (2006) : 性別役割分業論, 創価法学 **36**(2), pp. 33-67.
- 大子学のすすめ編集委員会 (2015) : 『大子学のすすめ』, 大子町教育委員会, p. 2.
- 中央教育審議会答申 (2021) : 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す, 個別最適な学びと, 協働的な学びの実現～, pp. 3-4.
- 生瀬小学校 (2022a) : 「令和4年度 父母と先生の会総会要項」
- 生瀬小学校 (2022b) : 「田植え体験学習への協力依頼について」
- 生瀬小学校 (2022c) : 「稲刈り体験学習への協力依頼について」
- 生瀬小学校 (2022d) : 「やまびこ祭」パンフレット
- 内閣府男女共同参画局 (2022) : 「令和4年度 性別による無意識の思いこみ (アンコンシャス・バイアス) に関する調査研究」
- 内閣府男女共同参画局 (1999) : 「男女共同参画社会基本法 (平成十一年六月二十三日法律第七十八号)」  
[https://www.gender.go.jp/about\\_danjo/law/kihon/9906kihonhou.html](https://www.gender.go.jp/about_danjo/law/kihon/9906kihonhou.html) (最終閲覧日 : 2022/12/22)
- 日本女性学習財団 : 「男女雇用機会均等法」  
<https://www.jawe2011.jp/cgi/keyword/keyword.cgi?num=n000143&mode=detail&catlist=1&onlist=1&shlist=1> (最終閲覧日 : 2022/12/22)
- 文部科学省 (2021) : 令和3年度「優良PTA 文部科学大臣表彰優良事例集」, p. 14.
- Cheung, C. K. (2009) : Evaluating the benefit from the help of the parent-teacher association to child performance. *Evaluation and Program Planning*, **32**(3), pp. 247-256.

World Economic Forum (2022) : Global Gender Gap Report 2022.  
[https://www3.weforum.org/docs/WEF\\_GGGR\\_2022.pdf](https://www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2022.pdf) (最終閲覧日 :  
2022/12/29)